

腹話術と信仰成長（5） —聖書は神のことば—

「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」（テモテへの手紙第二3章16節）

クリスチャンが腹話術を習い始める時、多くの人々が「聖書を子どもたちに伝えたいと思ったことが動機です」と言います。そして、事実その通りに、教会学校や子ども会などで、人形と共に聖書の話をする方々がおられます。ところがその内容は、残念ながら、日本昔話ならぬ“イスラエル昔話”か、単なる

“聖書物語”になっている場合が多いのです。それは、いったいどうしてでしょう。そして、どうしてそれではいけないのでしょうか。

まず、どうしてそうなるかという原因を考えてみましょう。

（1）腹話術はおもしろくなくてはいけない。

多分、腹話術を学んだみなさんは、「人形と話せば、聖書の話が楽しくなり、子どもたちが集中して聞いてくれるはずだ」と思っているのではないのでしょうか。ですから、何とかして、おもしろい台本を書こうとします。そのために、物語として話しやすい聖書箇所を選ぶでしょう。そうして、ストーリーを追いながら、あちこちに冗談を入れたりして、とにかく子どもたちが笑いながら聞いて（見て）くれるように工夫することに力を注ぐのです。

（2）聖書はむずかしくて、つまらない書物だから。

ある時、腹話術であちこちの子ども会で用いられていた姉妹が、言いました。「私は、子ども向けのテレビをよく見ているのよ。そこで流行っていることばとか歌とかを、人形に言わせたり歌わせたりすると、すごく受けるのよ。そうでもしないと、子どもは話を聞いてくれないでしょ。だって、聖書の話なんて（子どもにとっては）おもしろくもなんともないんだから・・・」それを聞いて私は一瞬耳を疑いましたが、後で考えてみると、それは多くのクリスチャンが心の奥底でかかえている葛藤であるかもしれない気が付きました。実際のところ、聖書とはクリスチャンになった大人でも、難解な箇所が多いですし、ましてや、まだ信仰のない子どもたちにとって、いったいどう話したら理解できるのでしょうか。つい「子どもの時は何も考えず、わからなくてもいい。とにかく、聖書にどんな話があるかだけでも覚えてもらえれば、大人になって本気で神さまを求める時に役に立つでしょう」というのが本音かもしれません。

けれども、それでは、神さまがどんなに心を痛めることでしょうか。神さまにとって、「聖書はわからない本である」という態度ほど悲しいものはないでしょう。なぜでしょうか。

（1）聖書は、生ける神さまのことばです。

聖書は決して“イスラエル昔話”ではありません。イスラエルから始まって世界中に伝えられてきた聖書の「福音」は、神さまから私たち人類（民族、性別、年齢を超えて）すべてに語りかけられている「神さまのことば」なのです。神さまは、神さまのことを知らず、考えたこともない罪の中に生きている私たちのために、ひとり子イエスさまを人として遣わし、十字架、復活、昇天、そして将来の再臨を通して、永遠の救いを備えられたことを、どうしても知ってほしいのです。ですから、腹話術という賜物をもって、「人形との会話」を通して、そのことを誰にでも伝えてほしいと願っておられるのです。

（2）神のことばは、「応答」を求めます。



聖書が神のことばであるということは、神さまから人間に対する語りかけですから、「聞いた人は、理解した程度に応じて応答しなければならない」という責任を伴うものです。つまり、どんな手段を用いようとも、聖書の話は、神さまからのメッセージとして語られなくてはならないし、聞いた側も、子どもであれ、大人であれ、その時理解した程度に応じて、神さまに対して「返事」をしなければならないわけです。（「信じます」とは限りませんが。）

聖書は、見えざるにいます霊である神さまからの愛の語りかけです。「霊のことは霊によってしかわからない」ものですが、人は霊的存在として造られていますし、霊の飢え渴きをもっていますから、聖書のことばは、聖霊の働きによって、どんな幼子でも理解できるのです。それを信じて大胆に語ってほしいものです。